

角の無い鬼と幻想郷

暇人（暇では無い(´・ω・`)）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔、昔のそのまた昔。ある所に角の無い鬼がおりました。

そんな鬼には、夢がありました。

ー人も、人外も、皆が仲良く暮らす世界ー

そんな世界に住む事が、鬼の夢でありました。

そんな鬼の、楽園に住む前、住んでいるときのお話。

筆者は筆不精であり、上手く書けない可能性が高いです。

また、失踪の可能性が大あります。

それでも良ければ、
ゆっくりして行ってね！

目次

第1話 「角の無い鬼とかぐや姫」

1

第2話 「藤原妹紅と地獄絵図」

7

第3話 「月の民と二人旅」 | 17

第4話 「太陽の畑と花妖怪①」

26

第5話 「太陽の畑と花妖怪②」

34

第6話 「優の力と二柱」 | 43

第7話 「優と妹紅とスキマ妖怪」

51

第8話 「優の本気と紫の本気」

60

第9話 「優と紫と桜の亡霊」

69

第1話 「角の無い鬼とかぐや姫」

私は、生まれつき、角が無かった。

なぜ私が鬼であると分かったのかは解らないが、その鬼の象徴とも言える角が無いことに気づいた時、少なからずショックを受けた。

まわりには角の無い鬼はおらず、誰が見ても分かるような形で迫害を受けた。唯一の親友と想っていた鬼も、まわりに同調し、私を避けた。生まれて間もない私は、その時点で現実の非情さを知った。

しかし、良いこともあった。角の無い私は人間から見ればただの子供であるらしく、私に親がないと知った人々は私に優しくしてくれた。

このまま静かに人と共に人生を過ごし、静かに死んでゆく。そう思っていた。あの時までは……。

~~~~~

人と過ごし始めて少したった頃、ある噂が立ち始めた。



夜。

人は寝静まり、辺りは猫が数匹歩くだけで、昼からは考えられないほど寂しくなっている。まあ、人が居れば居たで困るのだが。颯爽と夜道を駆け抜け屋敷へ向かう。

昼と人は違うが、未だに門番が立っている。これだけ警備が厳重ならば、より一層期待が出来る。

軽い身のこなしで、スツと屋敷に侵入。幸いにもまわりには人はおらず、そろりそろりと美女のいる場所を目指す。具体的に場所を知っている訳では無いが、こういうものは大抵奥の方に居ると相場が決まっている……という会話をどこかで聞いた気がする。ふと気づくと、一つだけ行燈あんどんがついている部屋がある。

そつと障子の破れ目から部屋を覗くと……、ビンゴである。スツと障子を開く。向こうの影がこちらに気づいたようである。

「お爺様？夜は入って来ないで下さいと言ったではありませんよう？」  
「どうやら私をお爺さんと勘違いしている様だ。」

「お爺様？聞こえていらつしやいますか？」  
「残念ながら私はお爺様ではありません。」

「あら……？こんな夜遅くにお客様ですか。それも女性の。」  
「そう言つて仕切りの奥から出てきた女性は大層綺麗であり、あんな噂が立つのも納得」

であつた。

いや、それよりも何でいきなり知らない人が入つてきたのに驚かないのか・・・

女性是我的の前にすつと座ると、

「私は輝夜と申します。あなたは？」

と言つた。そうだ、そう言えば、私には名が無いのだった。

ふむ、名前、名前・・・。

「どうやら名前が無いとお見受け致します。そうですね、人の名前を勝手に決めるのも不躰ですし、一緒に考えませんか？」

・・・！まさかこの人、エ〇パーか何かなのか!?

まあそんな訳は無いだろう。

「それでは、宜しくお願い致します、輝夜さん。」

「ふふ、そんなに固くならなくてもよろしいのですよ。気軽に輝夜、とお呼び下さい。」

「じゃあ、お互いに敬語を使うのを止めませんか？」

「そうしましょうか♪じゃあ、どうしましょう？」

私の名前決めはなかなか難航したが、私はこの時間が幸せであつた。ついこの間まで友達がいなかつたとは思えず、それこそ永遠にこの時間が続けば良いのに・・・。そう思つた。



「なかなか人の名前を考えるって難しいわねえ・・・。」

「うーん・・・、自分の名前を考えるって不思議な気持ち・・・。」

「あ、『優』なんてどうかしら？」

「『優』・・・。気に入った！」

優。いい名前である。しかし、私はこの名前の通り、人に、人以外にも優しくできるのだろうか・・・？

「出来るわよ。何たって私の友達なんだから♪」

「さり気なく心を読まないでよ・・・。」

やはり輝夜はエスオーなのか。

その後も、最近起こった出来事や、輝夜の屋敷での出来事など、他愛のない話で盛り上がった。

特に、輝夜に求婚してきた人たちに出した五つの難題の話は本当に面白かった。少し、その人達が可愛そうだとも思ったけれど。

「あら、もうこんな時間。そろそろ解散ね。」

「あ、ほんとだ。」

外を見ると、だんだん明るくなってきている。このままここに居たいのは山々だが、輝夜の家族に鉢合わせれば輝夜に迷惑がかかる。

「じゃ、そろそろ帰るわ。また明日ね。」

「あ、明日は夜に外せない用事があるの。」

「そうなの？じゃあ明後日ね。」

「・・・。そうね。じゃあまた明後日の夜に。」

『明後日』と言った時の間は何だったのか気になったが、深く詮索しない方が良いだろう。でも、何故か私が屋敷から出る時の輝夜の顔は少し悲しそうだった。

・・・。いつになっても、この時、何故詮索しなかったのかと、その時の私を恨んでしまう。

きつとあの時、明日の夜に何かあるのかと聞いておけば・・・。

きつと、輝夜は——

## 第2話

## 「藤原妹紅と地獄絵図」

朝起きると、妙な胸騒ぎがした。

まるで友人かぐやがどこか遠くへ行つてしまうような……。

しかし、昨日約束したのだ。私は約束を守れないような女では無い。仕方ないので、今日は最近通っている美味しい団子屋さんにも行つて1日ゆつくりしよう。

~~~~~

「おつちちゃん、みたらし2つちよーだーい」

「お、優。今日も来たか。全く、毎日来るのはお前ぐらいだぞ?」

はいよつ。とおつちちゃんがみたらし団子をくれる。

流石に毎日に来すぎなのかもしれないが、全てはこの団子が美味しいのが悪い。私は悪くねえ!

……つと、見ない顔がある。

白い綺麗な髪だ。輝夜は黒い透き通るような髪が綺麗だが、この子の白い髪も非常に綺麗である。私は・・・、気にしてはいけない。

おっと、話が逸れた。最近はずっとこの団子屋に通っているので、良く来ている客はみーんな覚えてしまった。

しかし、お金が無いのだろうか。私の特等席にポツーン、と座っている。ここは一つ、団子を利用して輝夜以外にも友達を増やす作戦を実行する！

「あの一、ずっとそこに座ってるけど、誰か待ってるの？良かつたらお団子食べる？ここのお団子、美味s」

「いらぬい。」

おお、初っ端から私のHPを半分近く削る攻撃を繰り出してきやがった。本当は私に言ったのだろうが、何故か団子を侮辱されている気がして無性に腹が立つ。

しかし、ここは『優』の名の通り、優しく接しなければ。私の友達を増やす作戦が失敗してしまう。

「・・・、横、座るね。」

「・・・。」

・・・、気まずい。とにかく隣に座ってはみたが、喋る事が無いので黙っているしかない。うう、沈黙が辛い・・・。

うーん、喋る事が無いなあ……。

「……、あんたはさ、あんたに優しくしてくれる人っている？」

むっ。話を振ってくれたことは嬉しいが、いきなり人をあんた呼ばわりとはいけない子である。ここは常識を教えて上げるべきか。いや、ここは会話を繋げなければ。

「そうだね……。まあ一応はいるかな。って言っても親はいないし二、三人いるかいなかぐらいだけだね。」

そう言つて、私は苦笑する。隣の子は一瞬、驚いたように目を見開いたが、すぐに元の暗い表情に戻る。

ふむ、この子は何か訳ありと見た。勘ではあるが、何故かそんな気がする。

「私さ、お父さんに捨てられたんだ。」

「……そりやまたどうして？」

「まだ決まった訳じゃないんだけどさ、最近ずうつとあそこにあるおつきな屋敷に通ってるんだ。噂じゃああそこには絶世の美女がいるらしいし。だからきつと、お父さんは私を捨てちゃったんだ。」

彼女の指さす方向を見ると……。なるほど。あれは輝夜の家だ。となると、今日の外せない用事があるってのは求婚を断るからか。

「だからさ、私、家出したんだ。使用人さんがお昼を持ってきたすぐあとに。」

「ふーん。んじゃあ今頃使用人さん達は慌てだろうねえ・・・。」

「そんな訳ないよ。あの人たちはお父さんに金で雇われただけ。私に優しくする理由はないし、私がいなかったらいなかったで仕事が楽になるんだから。」

「・・・、人の繋がりがりつて、そんなに脆いもんかねえ・・・。」

「ん、何か言った？」

「いんや、何も。あ、お団子食べる？」

「ん・・・。じゃあ貰つとく。」

話して落ち着いたからか、お団子をようやく食べ始めた。

気に入ったらしく、はむはむと一心不乱に食べている。団子は身分を超えるのである。(・ω・) キリッ

しかし、彼女の話を聞いていると、何故か昔の事を思い出してしまう。

「・・・、ダメダメ、考え事してたら時間はどんどんすぎて言ってしまう。もつと会話しないと友達にはなれない。」

「あなた、名前は？」

『藤原 妹紅』（ふじわらのもこう）。そういうあんたは？」

「人をあんな呼ばわりしないの。優って言うの。」

「ふーん。あ、まだお団子あるんじゃん。もーらいつと。」

「あーっ！それ私のみたらし団子お！」

「食べておかないのが悪い。」

「ぐぬぬぬぬぬ……おっちゃーん！みたらしもう2本!!」

食はずぎだぞー、という声が聞こえる気がするが、きつと幻聴だろう。お金には余裕があるし、糖分を取らなければ乙女は死んでしまうのだ。

「はいよつ、お待ちいつ……と、藤原さん所の娘さんじゃねえか。どうした？」

「あ、まあ色々あつてね。」

「……、優。お前の色々は信用ならんが、いらんことをするなよ？」

「そこら辺の常識は弁えてますよーだ。」

「はあ……。嬢ちゃん、こいつがちよつとでも変な動きをしたらすぐに呼んでくれよ？」

全く、おっちゃんはああいう所があるからモテないのである。細かいことを気にする奴は嫌われるのだ。主に私にだけど。

「ねえ、優。今日の夜、暇？」

「ん？んー、どうだろ。多分暇じゃないかな。」

「わかった。じゃあ今日の夜、ここに来てよ。」

「ん、いいよ。何かあるの？」

「その時まで秘密。」

「ふーん。んじやあまた今晚ね。」

「じゃあね〜。」

そう言つて、妹紅と別れ、家へと帰る。

とは言つても、今日のメインイベントである『団子屋でほのぼの』は終わつてしまつたので、する事が無い。

・・・、寝よ。

~~~~~

ドンドン、ドンドン、と扉を叩く音がする。

窓を見ると、まだ昼間であり、やけに明るい。

はいはあーい、と扉を開けると、

「あれ、妹紅じゃない。どしたの？まだ昼間だよ？」

「寝ぼけてる場合かつ！屋敷がすごいことになってるんだよ！」

「屋敷があ？」

「なんて言うか、説明しづらいからとにかく来て！」

なんのこつちや。(・ω・)

話を聞いても今ひとつ話が飲み込めないが、妹紅が嘘をつくとは思えないので、信じ



るしかない。

妹紅に手を引かれ、走っていると、

「何かね、空から何か降ってきて、それが屋敷に落ちたの。」

・・・前言撤回。どうやってこの証言を信じろと。

空から何か降ってきたって・・・、何かってなんだ。

「んでね、それが落ちたら急に光を放ってね、それを浴びたらみんな倒れちゃったんだよ。」

おお、初っ端から急展開。しかし、その光を真つ向から浴びてる私達は一体どうなっているのか。

「だからさ、気になって行こうと思ったんだけどさ、何か1人じゃ心配だったからあんたを連れてきたってわけ。」

「・・・、つまり私はただで雇われた妹紅の用心棒ってわけ？」

「あ、大丈夫。そんなに頼ってないから。」

うう、私の豆腐メンタルが着々と削られてゆく・・・。

しかし、さつきから変な音が屋敷から聞こえてくる。

「なんの音だろうね？」

「ちやつかり心を読むのはやめて。」

全く、人間はみんな○スパイなのだろうか。いや、実はさとり妖怪だったのか。

それよりも、屋敷に近づけば近づくほど光は強くなっていく。こんなことになるんならお気に入りの番傘でも持つてくれば良かったかなあ。

~~~~~

「さて、屋敷に着いたわけだけど、妹紅。」

「なんで止まるの？早く行こうよ！」

「いや、凄くまずい気がするからさ。どうする？引き返すなら今しかないけど。」

「ここまで来て何言ってるの！馬鹿なこと言ってるやないで早く行くよ！」

・・・、一瞬、真剣に後戻り出来ない気がした。

いつもみたいに適当に言ってるわけじゃない。この屋敷に入れば、何かを失う。そんな気がした。

まあ、そんな事を考えていてもこの光が収まる訳では無い。レッツ、潜入である。

~~~~~

「……一言で表すと、中は『地獄絵図』であった。」

見たことのない武器。それが刺さり、息絶えている者、首から上が無い者。片足を失い、地面を這いずつている者、いくつも出来ている血溜り……。

ぐつ、と吐き気がこみ上げる。隣の妹紅は青い顔をして固まっている。先程までの元気が嘘のようであり、今にも吐いてしまいそうである。

とにかく、進むしかない。外がこの様子だと、輝夜は、きつと、もう……。

「……いや、そんな筈は無い。輝夜のことだ。きつと生き延びて、いつもの様にニコツと笑ってくれるのであろう。」

だから私は、輝夜の元へ急がなければ。

「妹紅、大丈夫？」

「……、行くしか、無いでしょ。行こうって言ったのは、私……、なんだから。」

「ほんとに、大丈夫なの？」

「……、大丈夫。」

「わかった。行くよ。」

よく良く考えれば、何故この時生きていられたのかが不思議である。仮にも片方は鬼とはいえ、未知の武器を相手にして生きていられるとは考えにくい。

せめて薙刀ぐらい持っていけば良いのに……、と思う。

「……!!」

「ん、どした、妹紅?」

「あ、ああ……、こ、これ……。」

妹紅の指さす先を見ると、そこには人であったモノが転がっていた。原型をとどめないところを見ると、相当酷くやられたらしい。しかし、妹紅が気づいたのはそこでは無かった。

「このお守り、私が、父の、日にあげ、た……。あ、ああ、あああああああ  
!!!!」

もう、目を伏せるしかなかった。

自分では捨てられたと思っても、父は父である。

愛情は足りなくとも、手塩にかけて育ててくれた家族ぎ目の前で原型をとどめずに死んでいるのだ。シヨックどころの話ではない。

「妹紅……。」

「わかってる。行こう。」

……!この立ち直りのはやさ……。将来大物になるかもしれない。なあんて言っている場合では無い。全く、私は何を考察しているんだか。

## 第3話

## 「月の民と二人旅」

綺麗だったつい昨日までの廊下は血で塗まみれてしまい、人だったものを見て気が遠くなりそうになりながらも廊下を駆け抜け、最奥の部屋へと辿り着く。

壁に耳を当てると、何か言い争っているような声が聞こえる。ちらり、と妹紅の方を見やると、妹紅は頷く。

いざ、突入——

#####

輝夜の部屋は、廊下や庭ほど汚れてはいなく、強いて挙げるとすれば、1人の女性から垂れているだけである。

その女性は——

「優！貴女何しに来たの!？」

「……、輝夜では無かった。ほっと一安心……している場合では無い。輝夜は怪我をしていなくとも、その女性を見る限りではなかなか重症である。

何とかして助けなければ……、何とかって、何だ。(二回目)

「優！聞いてる!?!早く！早く逃げて!!」

「あー、一つ聞いていい?これどういう状況?」

「パツと見た限りでは、見たことの無い武器を構えた人?が数十人ほどで輝夜とその女性を取り囲んでいる。うーむ、全く状況が分からん。したがって、この質問をした私は悪くないはずである。」

「あー?誰だ貴様ア。」

「……。凄く……、柄が悪いです。」

日常生活で出会いたくないタイプナンバーワンである。

「私は、優。輝夜の友人です。」

「わ、私は……、えっと、か、輝夜さんの友人の友人です!あつ、藤原妹紅です。」

「そう言えば、妹紅は輝夜と直接的な縁があった訳じゃ無いのか。しかし、友人の友人……。」

「……。プツ。いや、輝夜様に貴様のような下民の知り合いがいる筈ないだろう。下民は

すぐに嘘を吐く。全く、これだから下民は嫌いなんだよ。こうして話しているだけでも吐き気がする。」

「優！こんな奴の言う事聞いてないで早く逃げて！そうじゃないと、貴方が殺される！」  
「どつちにしろ姫様も、永琳様も、下民共も皆殺しにするつもりだ。逃げても結局は殺されるのだ。諦めろ。精精月の民と話せたことを冥土の土産にするんだな。」

ー  
ー  
プ  
チツ。

私の中で、何かが切れる音がした。(そんな気がした)

輝夜を、殺す？下民共も、殺す？月の民と、話した事が、冥土の土産？

月の民は、そんなに偉いのか？

私は、『月』と言うものがどんな場所なのか知らない。どんな偉い人が住んでいるのかわからない。どれだけ強いのか、知らない。どれだけ賢いのか、知らない。

だが、そんな事が人を殺めても良いという理由になるのだろうか？

人の人生を奪つても良いという理由になるのだろうか？

人を悲しませても良いという理由になるのだろうか？

月の世界では、人を殺めてもいいのかもしれない。

月の世界では、理由になつてしまうのかもしれない。

月の世界では、悲しませて良いのかもしれない。

しかし、そんな決まりは、ここでは通用しない。

月の民（笑）がなんと言おうと、私は、怒る。

大切な友人を殺すと言う。みんなの日常を殺すと言う。

これでキレるなという方が酷である。

「……私は、嘘を吐いた。」

「何だあ？いきなり。はん、やっと認める気になつたか。姫様に下民の知り合いがいるわく」

「私は、輝夜の『友人』と言つた。私は、人では無い。私の名は、優。種族は、鬼。私は

これから、キレる。」

「はあ？何言つて……」

衝撃。

私を中心に、衝撃波が波紋の様に広がる。真横に居た妹紅は一瞬で吹き飛んでゆく。

ああ、これは怒られるな、と余計な事を考える。それよりも、体から溢れんばかりに湧



き出る力。あ、一番弱そうだったやつが白目を剥いて倒れた。湧き出過ぎて、一種のオーラのようになってる様だ。

まあ、この時点で何人倒れようが関係は無い。どの道全員倒すのだ。少し楽になるだけだ。

一步、踏み出す。

地面から岩の様なものが突き出し、四人、倒れる。

二歩目を、踏み出す。

一部屋根が崩れ、五人、倒れる。

三歩目を踏みしめる。

残るはこの全身から汗を垂れ流しているリーダー格のみ。

この技は、鬼の世界に古来より伝わる、一撃必殺の技。

——三歩必殺。

#####

次に目を開けた時には、屋敷には穴が開き、大変風通しが良くなっていた。

ふう、疲れた。この技は強力な反面、馬鹿みたいに体力を使うのだ。つと、忘れてた。妹紅を探しに行かなければ。

「おーい、妹紅。生きてる？死んでたら返事して。」

「……。」

「お、生きてるか。良かった良かった」

「良かねーよバツキャロー！」

「おお、しかも元気そうだ。これで医者に行かなくても良いな。」

「そういう事じゃねえー!!」

「ゆうう？ちよおーと、いいかしら？」

「……。(すつごい嫌な予感……)」

そーつと、振り向くと、輝夜がいつにも増してニコニコしながら立っている。あ、何だ。怒られるわけじゃないのか。良かった

ーパシイーン

張り手の快音がボロボロになってしまった屋敷に響く。い、痛い。普通に痛かったぞ、今の。どっかのサイ○人が怒るレベルだぞ。

「何て……、何て無茶するのよ!!」

「だってああするしか無かったじゃないの。」

「でも・・・、でも・・・!」

残念ながら、私は馬鹿かつ単細胞なので、実力行使しか思い浮かばない残念な人である。

和解? ナニソレオイシイノ? 状態とはこの事である。

「まあ過ぎたことは良いじゃないの。んで? 永琳さん、だっけ? これからどうすんの?」  
「そうねえ、月の追手に見つかるわけにもいかないし、どこかで姫様とひっそり暮らすわ。」

「ん。まあお元気だね。」

「・・・。結局私何もしてないじゃない。」

妹紅がブツブツ言っているが気にしない。だって私がやっちゃったんだもの。下手に私が関わると面倒くさそうなことになりそうだからね。

「じゃあね、輝夜。また、いつか。」

「あ、優! それに妹紅さんも!」

「は、はいいい!?! な、何ですか!?!」

ずっと独り言を言っていたので、急に呼ばれてびっくりしたようだ。全く、いつまで引きずってたんだか。

「永琳のね、特性の傷薬があるの！これ！」

「……、ほう。これを私達に飲めど？」

すくおどろおどろしい液体を目の前に突きつけられると、人はどんな顔をするのだろうか。大抵は酷い顔をするのだろう。きつと私も今、そんな顔をしているだろう。それほどこの液体は酷い色をしているのだ。

「飲むの？これを？」

「そーささ、ぐいっどぐいっど♪」

ゴクリ。

oh……。これを不味い以外で表すことが出来ないレベルの不味さである。

「……、何も変わった感じしないけど。」

「効能は見えないからわかんない。多分後から来るんじゃないの？」

「それダメなやつだったらどうするんだよ……。」

「ま、大丈夫、大丈夫！それを記念にと思つて忘れないでね！」

「逆にどうやって忘れたらいいの……。」

#####

「さて、これからどうする？妹紅。私はこれから旅つぼいものに行こうと思うんだけど。」

「ん。じゃあ私も行く。」

「ほんとに良いの？」

「もう決めたの。優に付いていくって。だから後悔しない。」

「そっか。んじゃ行くよ。」

こうして、私と妹紅の二人旅が始まったのであった。

## 第4話

## 「太陽の畑と花妖怪①」

妹紅と旅を初めてから、4年ほどたったある日。私たちは、ある妖怪に出会った。

#####

畑。yes。畑。

畑と言っても農作物が植わっている訳では無いらしく、あたり一面の花畑が広がっている。ここで隠れんぼしたら楽しそうだけど凄い見つけるのに時間かかりそうだな……。

それにしても綺麗な花だ。高さは私たちの身長の数倍はあるのではないかと言うほどで、そんな自然のトンネルを絶賛通過中なのです。いやー、トンネルってテンション上がるよね。こう、秘密の探検をしてるみたいな。

「綺麗な花だね〜。」

「そうかな。私は……ちよつと怖いかな。」

「そりやまた何ですよ？可愛らしいじゃん。」

「なんて言うかこう、見られてる？みたいな感じがするんだよ。」

「見られてる感じ、ねえ…？」

何という名前の花かは分からないが、黄色に染まった花が、日をもつともつと浴びたい、と言わんばかりに上を向いている。心做しか、この辺りは空気も澄んでいる気がする。またいつか、ピクニックにでも来ようと思うようないい場所である。

だが、ここはそんな綺麗な場所に似合わず、凶悪な妖怪が住み着いているようだ。里の人たちはみんな口を揃えて言うから多分間違いない。多分。

いや、ね？どんな妖怪かは聞いてないけどさ、強面の恐ろしそうな妖怪が笑顔で鼻歌でも歌いながら花に水をやっている様子を想像しただけで、もうそれはそれはシユールなもんで。会ってみたいような会ってみたいくないような。まあ半々ってところ。

んで、その妖怪。こつちから何もしなけりや特に何も無いらしいけど、花を折られたり盗られたりした時はもうそれは凄いらしい。1度目を閉じ、次に目を開けた時にはもう相手は消し炭で灰になっているそうさ。いやー、恐ろしい恐ろしい。

まあそれだけなら凶悪な妖怪とか言われないうらさうらさうけど、何しろ妖怪なんだから人も食べる訳で。しかもなんとその妖怪の家。この畑の出口に構えているらしい。つま

り、運が悪く妖怪が家にいれば捕まり、喰われるか消し炭になるかのどちらかだそう。また、逃げることも叶わないらしい。曰く、気付けば目の前に居るそう。

ちなみに、丁寧に育てられた花を持っていると、生存率が少し上昇するらしい。眉唾ではあるが、実際にその人が花妖怪と対峙して生きていたのだから信じるしかない。今では標準装備のようなものらしい。だが、手入れがされていなければ問答無用でやられるらしいので、その所は注意が必要である。

しかし残念なことに、私たちは花を持っていない。お金が無いのだ。私は鬼である以上あまりお腹は空かないし、妹紅も不老不死が故、食事を必要としない。なので、あまりお金を持つっていても意味が無いのだ。

つと、話が逸れた。

とにかく、私たちは純粋な運で行くしかないのだ。正直、そんなリスキーなことはしたくないし、出来ることなら迂回していききたいが、生憎迂回しようとするばそこは到底泳いで渡れるほどの広さではない巨大な湖であり、迂回は出来ない。したがって、ここを通っていくしか無いのだ。悲しいね。諸行無常だね。

と、家が見えてきた。一か八かの大博打である。

「妹紅、覚悟はいい？」



「あんまり。でもいくしかないでしょ。実際しぬのは優だけだし。」

「ああ、そうか。んじやあ覚悟しなきゃいけないのは私か。」

「——覚悟って、何の覚悟をするの？命を捨てる覚悟かしら。それなら重要ね。」

直感的に振り向く前に妹紅を抱え、声と反対方向に跳ぶ。次の瞬間、今まで居た場所から煙が上がる。

噂の花妖怪と対峙する。

うーん……。何と言うか、想像していたのと違った。もつとムキムキな感じの花妖怪を想像してたんだけどなあ。

真紅の——血に染まった訳では無いことを祈りたい——スカートの、それと対照的でよく映えている緑の綺麗な髪。今まで何人何匹もの人間や妖怪を葬ってきたであろう銃のようになってる日傘。それだけ見れば普通に人間に見えるだろうが、妖怪である事を決定付けるような冷酷な目付き。

うん。普通に怖い。相手は阿呆みたいな量の殺気バンバンに出してるし。しかも笑顔で。そのギャップが真剣に体を震わせる。まあ、取り敢えずは交渉ですよね。

「えーと、花妖怪さん。ここは音便に済んだり……」

「済むわけ無いじゃない。私の攻撃が避けられたなんて何年ぶりかしら。私ね、あなたという人間に興味が湧いたの。」

「つまり、今日が私の命日と言いたい訳ですか？」

「さあ、どうかしら。それはあなた次第じゃない。勝てば生きる。負ければ死ぬ。ただそれだけの簡単な話じゃない。」

「ああ、ゴもつともで。」

はい、交渉失敗。まあ分かりきってたけど。

あー、駄目だ。勝てる気がしない。と言うかもうこれあれでしょ。勝率0.1%未満でしょ。

相手が事故れば勝機はある。だけどその相手が簡単に事故するような相手じゃあない。ならばどうやって勝つのか。そんなもの私が聞きたい。(真顔)

最悪妹紅に再リザレクション誕生してもらえば何とかなる可能性が微レ存だけど、それでも無理なものは無理です。

あーやだやだ。死にたくなーい死にたくなーい。

#####

「……あなた、武器は持ってないの？」

「生憎、武器は両手両足の4つだけなんで。」

「ふうん。かと言ってこちらが武器を捨てるわけじゃ無いけどね。」

(?・?・?・?) デスヨネ。

あんまり期待してなかったけど。

「それじゃあルールを確認します。制限時間は10分。私が戦闘不能と判断すれば決着とします。いいですね？」

「ええ。」

「はい。」

「それじゃあ健闘を祈って……ファイツ！」

レフェリー妹紅の声によって、戦いの火蓋が切って落とされる。

花妖怪は小手調べとでも言わんばかりに妖力弾を放ってくる。こちらも放って相殺したいところだが、残念なことに私には妖力の欠けらも無い。軽いフットワークで避け、最後の1球を力を込めて蹴り返す。だが、蹴り返した球は花妖怪の目前で碎け散る。どうやら魔力だか妖力だかは分からないが、防御壁のようなものを張っているようだ。仕方ない、接近戦に持ち込むしかないか。

間が目算20メートルほどあった状態から一気に5メートル程まで詰める。だが花妖怪は動じない。それどころか『かかってこい』という風なポーズさえとっている。良いだろう。その挑発、のつてやる。

そこから跳躍し、体重に重力を上乗せした拳をお見舞いしてやる。だがまあ予想どうりと言えば予想どうりと言うべきか、止められた。それどころかその瞬間、手首までだけを抑えられただけの状態で背負投を喰らう。予想外の事に対応が遅れ、無様に地面に打ちつけられる。グフツ、と苦悶の声を漏らす。

花妖怪は殺す目的ではなく、愉しむのが目的で戦っているらしく、地面に打ちつけられた俺に止めは刺さず、蹴り飛ばす。メキメキツ、と嫌な音が鳴り、吹き飛ばされる。大木に直撃し、3分の1ほど体がめり込む。花妖怪は余裕の表情で悠々と歩いてくる。

で、出れない……。気付くと花妖怪は目の前に居る。

「私の攻撃をもろに喰らって生きてるなんて頑丈なのね。まあこれから死ぬから関係ないか。」

そう言つて、拳を振り上げる。

「さようなら、お強い人間さん。」

……。なんて言うか、私つてよく嘘をつくなあ、と思つた。

私はさつき、『武器は両手両足の4つだけなんです。』と言つたが、あれは嘘だ。(イケボ)

もう一つ、強力な武器を持っているのだ。今こそその武器を用いて花妖怪に反撃してやるのだ。

全身に力を込め、大木から抜け出す。そして、よくその武器を振りかぶって……ぶつける！

……ゴイイーン……

鈍い音が響く。

花妖怪は後ろに跳んで、驚いた顔をしている。手に力が入っていないあたり、どうやら折れたようだ。

「……あなたって、結構凄いわね。色んな意味で。」

そう言えば、その武器の事をまだ言っていなかった。

私の最後の武器。それは……

……head。つまり、『頭』である。

## 第5話 「太陽の焔と花妖怪②」

そう、何を隠そう私は超石頭なのである。

恐らく、そこらの今なら簡単に破壊することができだろう。もしかすると、鉄とかでも壊せるかもしれない。まったく、自分の頭なのに恐ろしいことだ。くわばらくわばら。

それなのにも関わらず、花妖怪の腕は軽く折れただけであり、逆にこちらの心が折れてしまいそうだ。って言うか、あの花妖怪、強すぎるでしょ。まだ頭がガンガンしている。

「ふうん…。結構やるのね。それじゃあ、ちよつと本気を出そうかしらね。」

あつもう止めて下さい。それ以上やられれば塵一つ残らない可能性が高いです。私が賭けで負ける確率ぐらい高いです。

だからほら、そのオーラみたいな出すの止めて下さい。遠くで見ている妹紅でも汗が止まってないから。足もガクガクしてるし。

…あ、オーラが腕にまとわりついた。

『リザレクション  
復活』

へアッ!? 何で!? 何で妹紅の技使えんの!?

しかも腕! せつかく折つたのに治されちゃったよ! ここで振り出しに戻った、なんて言えたらいいけどね! こっちは満身創痍なのに、あっちはピンピンしてるからね! もう、どうしようも無いね! 勝負は見えたね! (泣&諦め)

ああ、これはまずいな。どんどん相手の力が湧いてきているのがわかる。こんな状態でさっきの妖力弾なんか撃たれたらー。

シユウウン、ドオーン……!!

妖力弾が耳元をすり抜け、私の髪を靡なびかせる。恐る恐る振り向くと、そこには半径二メートルはあるであろうクレーターが出来ている。

「どうしたのかしら? 私はまだ全力じゃないわよ? ほらほら、かかつて来なさいな。」

どうせ逃げても捕まって殺されるだけだ。ふう、と覚悟を決め、花妖怪の方へと走り始める。先ほどよりも数倍は速いであろう妖力弾が飛んでくるが、紙一重で躲す。

「そんなので逃げ腰になってたら一生私の元には辿り着けないわよ!」

その通りです。勝つ気ないし。実力が違いすぎる。

といつても結局は勝たなければ先へは進めないのだ。ましてや、妹紅を戦わせるわけにはいかない。つまり、私は絶対に勝たないといけない訳だ。世知辛い運命ですな。

……  
呼吸を整える。

思い出せ、初めて暴走したあの夜のことを。あんな状態になってしまえば私はただただ攻撃し続けるだけだ。負けは見えている。ならばどうするか。あの力を操るしかない。

落ち着け、私。何を焦る必要がある。大丈夫だ。きつと成功する。今までも色んな困難を乗り越えて来ただろう？今からするのは、とても簡単な事。

「……………、『バースト精神強化』」

「……………っ！」

わたしから、力が溢れる。

この技は、霊力、魔力、妖力、神力のどれにも当てはまらない、私が編み出した力。『精神力』。

種類のには気力とよく似ている。自分の精神力が強ければ強く、不安などが胸の内を蝕んだりすれば弱くなる。全ては自分の心次第という訳だ。…私、豆腐メンタルですけど。

すつ、と歩みを進めるように一歩踏み出す。しかしそれは肉眼では捕えられず、花妖怪には瞬間移動したかのように見えるはずだ。

「くっ……………どいへ!?!」

「後ろですよ、後ろ。」



「！」

咄嗟の反応で、花妖怪は傘を後ろに振る。その威力は急な場合であっても減衰はせず、極度の風圧が巻き起こる。それに当たれば、吹き飛ぶだけでは済まないだろう。：：当たれば、だが。

さっきの言葉はもちろん嘘だ。耳元で囁いた瞬間に上へと跳ぶ。本当は飛びたいところだが、生憎『精神強化』には飛ぶ力は無いのだ。

上へ跳ぶと、軽く空中で一回転し、かかと落としを決める。しつかりと脳天へと命中し、決まったと思ったが、大妖怪の名は伊達ではないようだ。よろめきながらも再び立ち上がる。そろそろこっちの精神強化も切れるんで、倒れてくれても良いんですよ？まあ、何にせよ後少しだろう。頑張れ私。

「：：ふうっ：：。あと少し、などとも思ってるのでしよう？」  
「：：：：！？」

「残念ね。私はもう一つ、強力な隠し玉を残しているのよ。」

「：：：：それ、ばらしちゃっても良いんですか？」

「ええ。だって、必ず当たるもの。」

えらい自信だ。

避けられないほどの広範囲攻撃か。はたまた、私が気付かない程の速さで攻撃して来

るのか。どう来るのかは分からないが、防御するしかない。

「あなたが防御を選択した瞬間、あなたの負けは決まっているのよ。」

「……くっ!？」

気付くと花妖怪は目の前に居る。

まだ精神強化は続いているはずだ。そう思つて後ろへ下がろうとすると、

「くっ……これは!」

「ふふっ。言つたでしょう? あなたの負けは決まっているのよ。」

足に蔦が絡みついていて。そうだ。戦闘力ばかりに気を取られて忘れていた。この花妖怪は植物を操るのだった。

「それじゃあ、さようなら。『マスタースパーク』。」

刹那、私の体は白に包まれる。

その中で身に染みて感じたのは、自分の弱さだった。

#####

——やーいやーい。角なし鬼さーん。

——くくっ、ちよつと、止めなさいよ。可哀想でしょ? ……くくっ。

——角の無い奴なんて、仲間に入れてやらな——い。

——鬼もどきは人里に帰れ——!

ああ、これは昔の記憶。あの忌々しい記憶。私は今、夢を見ているのだ。

あの頃、私は角がないというだけで誰にも相手にしてもらえなかった。親も顔を覚えないうちに何処かへ行ってしまった。そうする内に、いつの間にか私は里の外へ放り出されていた。

私は、頼みの綱の、人里へ向かった。ポロポロの体で行ったものだから、稗田家の皆さんには良くしてもらったものだ。

——もう、人として生きよう——

そんな考えが心の隅に巣食った。

私は人として、ただひたすら自由奔放に生きた。

鬼なんて肩書きは捨てた。妖力が無かったのもちようど良かった。

——意識が、呼び戻される。

# # # # #

「：：：う、ゆ：：！」

「うっ：：！？」

「優！よかつた！目を覚ましたのね！幽香さーん！優が起きました！」

知らない天井。ここはどこだ？さつきまで私はあの恐ろしい花妖怪と1戦交えて：：

ズキツ、と頭が痛む。頭だけではない。体の節々が痛む。これは精神強化のデメリットだ。

極限まで精神力を高めるのと引き換えに、使い終わってからきつかり2時間後。体が痛み始めるのだ。これがまた痛いどころではない。しばらくはまた、使用を控えなければならぬ。

そう言えば、『幽香』とは誰だ？知り合いにそんな人は居ない。だとすると、妹紅の知り合いか？

ふと、偶然そこにあつた窓から外を見やる。そこに広がる一面の向日畑。ついさつきの死闘が思い起こされる。

「幽香ってまさか：：：：！」

「あら、随分と遅いお目覚めね。」

そこに居たのは他でもない、先ほどの花妖怪だ。

「つてことはここは……！」

「早く起きなさい。もうお茶を始めてるわよ。」

「……どうしたらそうなるのか。さっぱりだ。」

「さて、単刀直入に言うわ。」

「何でしょう？」

妹紅が答える。私の方を向いているのに妹紅が身を乗り出して答えているのは何故だろうか？

「貴女達、お友達になつてくれないかしら？」

「……はい？」「いいですよ！喜んで！」……「ちよつと。」

いきなりつい先程まで全力で殺しあつていたやつに対する言葉ではない。そうだ、きつとこれは妹紅に言っているのだ。それならば妹紅が答えるのにも納得がいく。そうだ。きつとそうに違いはない。うん。私は信じている。

幽香の話によると、これまでもこういうこと（友達になつてくれないかと言う事）は何回かやって来たそうだが、どれも不発。まあそれもそうだ。あの風見幽香が友達に

なつてくれないかと言つてくるのだ。逃げ出すのも無理はないだろう。

はあ。また厄介な友人が増えた。今のところ他には輝夜しかないのだが。何時か友人が多すぎて困る、とか言つてみたいものである。

▼ 風見 幽香が 友人に なつた！

## 第6話 「優の力と二柱」

あの恐ろしい花妖怪——幽香、だったか。——との死闘からおよそ2ヶ月後ぐらい経ったところ。私達はようやく諏訪の里に着く事が出来た。幽香との戦闘のせいでもしかすると私が本当に人外と言う噂が出回っているのではないかと少し心配になったりもしたが、別段そんな事は無かったようだ。一安心。

諏訪の里は前に居た里よりも数倍大きく、それに比例して人の動きも激しい。あちらこちらから商人の声を呼び込むが聞こえて来ており、商業で発展している面も見受けられる。新鮮な野菜に魚。(ここは内陸地であり、海の魚は扱っていないようだ。うーん、私、鰯とか鯖とか好きなんだけどなあ……。)木などで作られた立派な家具。そして何よりも目立っているのが、魔よけなど、様々な効能のお札。(ここの人達はお守りとして使っているようだ。)

聞くところによると、ここ、諏訪の里は近くの山の上に大きな神社があり、そこを中心として発展しているようだ。そのため、その神社で作られたお札は大層人気があるそうだ。妹紅も気になっているようだ。後で寄るとしよう。

さて、その神社には『後で寄る』と言ったのには理由がある。それはズバリ、『温泉』である。

諏訪の里には、神社（諏訪神社と言うそうだ。）の他にももう一つ有名なものがある。それが温泉なのだ。温泉は言葉で表すと、「熱い水に浸かったり、熱い水を体にかける」と言う意味不明な行動にしか聞こえないが、それはそれは天にも登るような気持ちよさだそう。ここは一つ、天に登ってやろうじゃないかと言う事だ。私も興味があるし、妹紅も行きたがっているの、早速行こうではないか。

#####

カポーン、と心地よい音が聞こえてきそうな温泉にやって来た。

「ん、なんと言うか、これは凄いねえ…。」

「うん。言葉では表せないね…。」

私と妹紅は今、目の前に広がる光景に見とれ、立ち尽くしていた。

温泉からもうもうと立ち上る湯気。それに浸かり、とても幸せそうにしている人々。そして何よりも、とにかく広いのだ。温泉と言っても、せいぜい1度に入れるのは10



「15人ほどだと思っていたが、詰めれば40人ほどは入れるのではないかと言うレベルだ。」

「そんな広大な温泉を目の前に、私達は立ち尽くしていたのだ。」

「：： 取り敢えず、入ろつか。」

「ん、そだね。」

いつまで経つてもそこに突っ立っていると、周りからすればただただ迷惑なだけなので、意を決して入ることにする。

チャポン、と音を立てながらいざ入水。いや、入湯か。

：：：： あああ：：、温泉を発明したのって誰なんだろう。今すぐその人のところへ行って溢れんばかりの感謝の意を伝えたい。

何だこの気持ちよさは。まるで体から疲労が湯に溶け出ていく様だ。ここまで歩いてきた時の披露も、幽香と戦った時の疲労も、全てを流してくれる。横の妹紅も気持ちいいのか、自然と顔がにやけている。いつもなら気持ち悪い、と一蹴するのだが、今だけは理由が分かっている。そんな事はしない。もしかすると、私にもやけているかもしれない。まあ、今はそんな事はどうでもいいと思えた。いつか私の家が出来たら、絶対に温泉が欲しいな、と思った。

しばらく温泉を楽しむと、名残惜しいが出ることにした。お昼時もとつくに過ぎていた。このままでは神社に行けなくなってしまう。すぐに用意を済ませ、神社へと歩き始めた。さらば、温泉。また来るよ。

#####

神社は想像以上に高い位置にあり、里を少し出たあたりには既に石段があった。急勾配を避けるためか、石段は左右にうねっている。半分ほど登ったところで、妹紅が肩で息をしているのに気付き、おんぶする事にした。少しはしゃいでるところを見て、不老不死とは言え、まだまだ子供だな、と思うと同時に、私にもこういう頃があったら良かったな、と少し寂しく感じられた。

石段を登りきる頃には今度は私が肩で息をしており、妹紅がはしやぎながら手を引くので、無理矢理走らされるのが大分体に堪えた。ちくせう。誰がチミを石段のテツペンまで運んだと思っっているのだね。

温泉と同じで、神社も想像以上の広さだった。本殿は文句の無いほど広く、地面には石畳や砂利が敷かれており、小さいながらも小売店もあった。前を通り過ぎようとする

と、小売店に居た、緑の髪に付けた花飾りがチャームポイントっぽい女の子が声をかけてきた。

「あら、本殿までいらっしやっただんですか？石段も長かったでしょうに、わざわざ御参りありがとうございます。」

「どうも、こんにちは。… って、え？本殿までわざわざってどういう事ですか？」

「あー、旅の方でしたか。実はですね、知つての通り、ここまで来るのには石段が長すぎて、年配の方々にはなかなか来てもらえないんですよ。」

普通の人でもここまで来るのは大変でしょうに、と心の中で少し毒づく。

「なので、里の方に分社を作ったんですよ。そこでもお守りを売っているの、最近はこちらへ来てくださる人が少ないんですけどね。…」

なるほど、分社があったのか。まあ当初の目的はここに來ることだからいいんだけど。もしお守りを買う事が目的だったら、今頃石畳に拳を打ちつけてバキバキに割ってしまったっていただろう。

「…それで、さつきからあそこに座って私のことを睨んでる御二方はどちら様で？」

「…え？神奈子様と諏訪子様が見えるんですか？」

緑の髪の少女は驚いた顔でこちらを見つめる。そんなに不思議なことなのだろうか。

あ、もしかしてあの2人は神様なのだろうか。それなら見えなくて当…、私、なんで見えるんだろ？

「妹紅はあの2人見える？」

「… 2人つて、何の事？誰も居ないじゃん。」

うーむ、どうやら妹紅には見えないようだ。余計になぜ見えるのが気になる。

「…………… あんた、鬼だね？」

「…………… どうして分かったんです？」

「え？え？… どういう事です？」

紫の髪の女性が問いかける。微かだが殺気を放っているところを見ると、こっちはその気になればいつでもお前を殺せる、と言ったところだろうか。しかし、緑の髪の少女は全く分かっていない様子。どうやら、まだ見習いのようだ…………… まあ、見習いに見抜かれたらそれはそれで困るんだけど。

「んで、鬼様が角まで隠してなんの御用で？」

「あ、別に角、隠してないです。私、生まれつき角が無いんですよ。」

「…………… え？角が、無い？」

いつの間にか紫の髪の横に来ていた金髪の女の子が驚きの表情を浮かべている。それもそうだ。角は鬼の象徴なのだ。鬼は角がなければ鬼とは言えない。結果、私が迫害

を受けるような状況になる訳だ。はあ、せっかくお忍び旅行的な気分楽しんでたんだけれども、バレてしまっっては迷惑がかかってしまうだろう。

「あ、私たちはただ単に神社を見に来ただけで危害を加えるとかどうこうするというわけでは無いのでどうぞお構いなく。」

危害を加える程の力は無、とは流石に言えない。

「ちよつと、優ー！私だけ置いてかないでよー！」

これ以上追求されても困るので、さつきと退散することにしよう。あ、お守り買い忘れた。まあいい。里の分社で買おう。『安全祈願』とか無いかな…。

「なあ、ちよつとあんた。」

「… なんですか、まだ何か用がお有りですか？」

「… あおのさ、また。また、来なよ。今度は観光とかじゃなくて私たちに会いにさ。」

少し拍子抜けした所があった。今日あつたばかりの得体の知れない私にまた来いと言うとは、何か企んでいるのかと怪しんでしまう。あ、あれか。私がボツチなのを推測して今度女子会やろうぜ的なやつか。そりゃあいい返事をするしかない。

「はい。喜んで。また来させて頂きます。」

その返事が返つてくると、紫の髪の女性はすぐにふふつ、と微笑んだ。私は永遠に出来ないであろうそんな大人っぽい笑みが、羨ましく思えた。

あ、そう言えば、これは友達になった、と言うことで良いのだろうか。うん、良いの  
だろう。じゃないと女子会とかしないよね。

▼・ 神奈子と 諏訪子が 友達に なった！（気がする！）

□  
□  
□

「優、ねえ…。不思議な妖怪ね。少し調べておこうかしら。」  
優とあるスキマ妖怪が出会うまで、あともう少し。

## 第7話

## 「優と妹紅とスキマ妖怪」

「ねえ、優。ちよつといい？」

「ん、何？トイレでも行きたいの？」

「んなわけないでしょ。す、凄い言いにくいんだけどさ。あの…」

「何？何やらかしたの？」

「ーっつた。」

「え？何て？」

「…迷った。」

という訳で、私達は絶賛道に迷い中である。

いや、妹紅が悪い。私が前を言った時も何度か迷って死にかけてりもしたけど、今回は完全に妹紅が悪い。だって妹紅、自信満々で『この辺りの事は詳しいから道案内は任せて！… 優に任せたらすごい怖いし。(ボソツ)』とか言うから私が無理やりやるよりも良いかと思つて任せたらこれだよ！つまり俺は悪くねえ！

まったく、おてんば妹紅ちゃんは今に始まったことじゃないけどこういう真面目な時ぐらいは控えてほしいもんだね。恥ずかしがってる妹紅はすごい可愛いけどね。

「いや、違うんだって！ほんとに小さい頃はよくここ通ったんだって！」

「はいはい。聞き苦しい言い訳は分かったから取り敢えず進みましょうねー。」

「むー、信じてよー…。」

あ、ぷくーつと膨れた。こんな妹紅も可愛い。ほっぺを今すぐつつきたい…。

…つて、そんな事考えてる場合じゃない。今は結構本気で真剣に迷ってたんだ。妹紅は道が分からない、私はそもそも論外。それならこの状況は…詰みです。

しゃーない。また迷われたら困るけど、私が前に行くよりもよっほどましか。もっかい妹紅に頼もう。

「おーい、もーーー」

後ろを向くと、下に落ちていく妹紅。あ、凄い顔してる。つて、こんな所に落とし穴？んなわけない。私を通った時は落とし穴なんて無かった。じゃあ何か？分からないけど、とにかく妹紅がまずい！

「おおおおおおお！！！！」

全身全霊をかけて妹紅の方へと跳ぶ。だが、そんなふたりの間に突如として現れたのは…

「は？…穴？」

突如として空間が裂け、穴が現れる。その穴の中の数え切れない程の目が一斉にギョ



口り、とこちらを睨む。

これはやばい、と思ったのも束の間、優は穴に吸い込まれていった…。

#####

「ぐえっ」「ぐふっ」

2人とも強く背中を打ち付け、苦悶の声を漏らす。

いたた、と眩きながら立ち上がると、なんと辺りは和風の家に変化していた。正方形のような形の部屋で、4面には障子がついている。

「妹紅、大丈夫？」

「ん。まあ背中がジンジンするぐらいかな。」

「じゃあおけ。取り敢えずどっかに進もうか。」

「だねー。じゃあ何となく前で。」

妹紅の希望通り、前の障子を開ける。

「いや何これ。」

そこには、先ほどの部屋と同じような光景が広がっており、唯一違う点は私たちが居ない程度である。

「これは… どうする？」

「まあ、もう一回どれかに進もうか。」

そう言つて、今度は右側の障子を開く。そこはまあ当然の如く同じ光景が広がっていた。あ、だめやん。これ無限ループやん。

「… 優、いい事思ひ付いた。」

そう言つて妹紅はニヤリと微かに笑う。私は知っている。この笑いは妹紅が何かやらかす時の笑いだ。

「妹紅？まさか実力行使とか言わないよね？」

「言うんですよそれが」

「やめて下さい誰かにすごい怒られる気がします。」

まあそれだけじゃなくて、人の家を勝手に壊すつて言うのは人としてどうかと思うところもあるけどね… 私、人じゃあ無いんですけどね。そう考えると私つてますます人っぽいなあ…と思う今日このごろ。

「私今、凄いいライイラしてるの！」

「まあまあ。取り敢えず一方向にひたすら進んでみよう？壊しても解決しないこともあるよ。」

「むー、スッキリしないー。」

「はいはい。ストレス解消はまた今度。」

何とか妹紅の破壊衝動を抑え、次へと進む。妹紅はいつもは可愛いが、ストレスが溜まるとやばいのが玉に瑕だ。お陰で一回、…いや、二、三回は死にかけた。あの時の妹紅はまじ怖かったです。はい。目がギラギラしてていかにも血に飢えてますって感じでしたね。おお、こわいこわい。

まあ、ストレス溜まつてるのは妹紅だけじゃないんですけどね。さつきから数えてたら、もう数十部屋は過ぎたはずなのに、一向に景色が変わらない。最初は和室って綺麗だなく的な感じだったけど、流石にそろそろ嫌気が差してきますわあ…。

…と、やっと着いた感じがする。大体三十七部屋ってところかね。え、なんで分かって？乙女の勘ってやつですよ。私、もう年が乙女ってレベルじゃないんですけどね。妹紅より数<sup>すうひやくさい</sup>100歳は上ですからね。悲しいね。

「さて、妹紅。行く？」

「モチのロンですよ。取り敢えず殴りたい。」

「どうどう、落ち着きましようねー。」

そう言つて、最後の障子を開ける。

#####

「あら、意外と早かったのね。」

そう言つて、座布団から……つて、え？今、座布団が回つたんですけど!?……ほう、私  
が知らない間に座布団は回るようになっていたというわけですかそうですか。

と、素朴な疑問は置いて。

白い帽子に紫の服。すらつと伸びた背。うん。何か凄いこと出来ますよオーラが  
漂つておりますな。この間の幽香戦が軽くトラウマだから大物には会いたくないんで  
すよ。ガクブルガクブル。

何はともあれ、会話をしよう。会話の力は偉大だ。1にコミュニケーション、2にコ  
ミュニケーション。実力行使？知らない子ですね。

「……あなたがこれ、仕組んだんですか？」

「そうだと言ったら？」

「取り敢えず謝ってください。あ、呼んだ事じゃないですよ、アポを取らなかつた事  
です。お陰で横の……あ、申し遅れました。私は優、と言います。こっちは藤原妹  
紅……で、その妹紅がストレスでプチギレそうなんですよね。」

『殺す！』とか『ふーん。』みたいな反応が返ってくると思つていたのか、どうやら意外  
な反応だったようで、数秒間すうびようまが開く。その後、クスリ、笑みを漏らし、

「そうね。ごめんなさい。早く貴女に会いたかったの。でも、事前に言えば面白くないでしょう?」

「そのせいで私が死ぬと意味無いですけどね。」

「フフツ。笑えない冗談ね。」

「その笑いは何なんですか?。」

「… あー、あのさ。そろそろいい?」

「ん、どしたの?」「あら、何かしら。」

「結局用件は何なの? 優に用事みただけ。」

「そうだ、すっかり忘れていた。実際はこの人の家に招待されただけかもしれないけど、第三者から見ればこれは立派な誘拐にしか見えない。」

「単刀直入に言うわ。」

「単刀直入単刀直入って、大物は『単刀直入』: いや、四字熟語が好きなんですか? : 私も使えば強く見られるかな?」

「貴女: 『楽園』に興味は無い?」

□  
□  
□  
□  
□

その後、あらかた紫ゆかりから——紫とは、この紫むらさきの服を着た人の名前だ——『楽園』についての話を聞いた。

妖怪も、人間も、神様までもが平和に暮らせる世界。その世界を紫の能力、『境界を操る程度の能力』を使って作るプロジェクト。それが、通称『楽園』という訳だ。

私と呼ばれた理由は主に二つ。

- 1、『楽園』の正式名称を考える。
- 2、大まかなルールを作る。

こんな『楽園』の大部分に関わる仕事を任されたのは何故かと問うと、「貴女に興味が湧いたから。」だそうだ。

まったく、そんな事で私なんかを選んでしまつて良かったのか。もし私が断つたらどうするつもりだったのだろう。まあ、私は優しいから断りませんけどね。どやあ……。つて、紫が目を付けたのはその私のお人好しな所か。ガツクリ。

□□□□□□□□

紫の発案した一大プロジェクト、『楽園』。

実際、興味はすぐくある。今でこそ妖怪は恐れられているけど、そのうち人間も発展してくるだろう。そうなれば妖怪に居場所は無い。妖怪にとつては願ったり叶ったりな話だ。

でも、心のどこかで不安な気持ちもある。妖怪でも人間でも無い私に居場所はあるのか、と。また、あの記憶が呼び戻されるのか、と。

それでもきつと、私は楽園に住むのだろう。

妖怪に除け者にされても。人間に避けられても。

私はきつと、どこかで何かしらの居場所を見つけて、そこに住むのだろう。

それでももし、私が除け者にされなかつたら。避けられなかつたら。

私は心から笑い、その生活を楽しむだろう。

そんなちよつとした幻想きぼうに思いを秘め、『楽園』の名を、『幻想郷』とする事にした。

## 第8話

## 「優の本気と紫の本気」

紫に楽園の名前、『幻想郷』を提案すると、紫は気に入ってくれたようで、二つ返事で了承してくれた。これで断られたら凄く悲しかったから良かったね。豆腐メンタルが削られずに済んだね。

その間に妹紅は紫と一緒にルールについていくつか考えてくれていた。サボってたかと思ってた。

一：人が妖怪に襲われない安全な地域を作ること。（外に出れば襲われても文句は言えない。）

二：天狗と鬼は、他の妖怪とは違った場所に住む。（そうしなければ鬼の独裁社会になる。）

三：人間や妖怪が騒ぎを起こせば、決まった人間が騒ぎを収める。《この人間を博麗の巫女と言う。》

ふむ、意外とまともに考えていた。もつとこう、人間なんか知るかー的な感じのルールを作ってるんじゃないかと思ってたね。あ、妹紅の視線が痛い。

「……で、ルールまだ三つしか決まってるじゃないけど？」



「まあ、そこは…… いずれ何とかするわよ。」

「んな無責任なことを。」

「私もやる時はきちんとやるのよ。」

「どの口が言うんだかね。」

「こういう会話をしていると、紫は実はそんなに凄いや無いやないのかと思っ  
てしまう。そんな事考えてると消し炭になれるけどね。」

「ねえ、優？」

「ん、何？まだ何かあるの？」

「ええ、これが最後のお願ひよ。」

「その『最後』が何度もありそうで怖いわ……。んで、その最後のお願ひとやらの内容は  
？」

「…… 一つ、お手合わせ願ひえますか？」

#####

いやいやいや、どうしてこうなった。

幻想郷のルールを考える。↓しばらく紫と談笑する。↓そこから別れる。

の流れの筈だった私の早々にここから立ち去る計画を真つ向から潰してくるとは流石妖怪の賢者！人間には出来ない事を平然とやってのける！そこに痺れぬ憧れぬう！

しかもお願いの内容が手合わせとか巫山戯ていやがる。もうダメだ。始まった瞬間に降参するしかない。

「降参したら私の式になってもらおうかしら。」

「誰になるか。」「貴女よ。」「全力で断る。」

私の生きるための最後のノゾミガタタレター。

しかも私、自分の能力知らない上に紫の能力も知らないし。もうダメだ。幽香戦以上詰みだ。

そうだ、これは妖怪が起こした騒ぎだ。博麗の巫女を呼ばなきや。助けて、巫女さーん。

「ほらほら、もうかかってきていいんですよ？」

「はあ、勝負受けたの私でしたよね？」

「ここまで来れば仕方が無い。やるしか無い。あんまり本気は出したくないタイプなんだけどなあ……。」

「……………行きます。」

そう言うと、初っ端から精神力を全開放し、拳を振りかぶって紫に殴り掛かる。

「そんな見え見えの攻撃が当たるとでも思っているのかしら？だとしたら、随分な期待はずれね。」

「期待はずれで結構！」

当然の如く、紫は軽くないです。

……もうさ、こんな無理ゲーやん。最速の攻撃が見え見えとかあかんやん。勝てる訳無いやん。て言うかそもそも期待されていたことに驚きを隠せない私はどうすればいいんでしょう？

ふう、くよくよしても仕方ないので、無理やりに気持ち切り替え、手数で攻めることにする。対する紫は結界を張り、守りの姿勢。

「その程度の結界、無駄無駄無駄無駄無駄あー！」

「くっ……！」

1発当てる度に軽い衝撃波を出し、結界にヒビを入れていく。妹紅の防御手段が結界だった事も加わり、結界の破壊には慣れている。

「とおりやああつ!!」

「ぐっ……!!」

最後の1発を当てる瞬間に先程よりも強い衝撃波を出し、結界を破壊。それと同時に

紫を吹き飛ばす。壁にぶつかり、砂煙が巻き起こる。手応えあり。…手応えは、あるのだが。

「ふうっ、…まあっ、当然、つちやあ、当然、か。」

そこには、当然のように無傷の紫が立っている。回復したのか元から効いていないのか、どちらかは分からないが、心に来ることには変わらない。

「もう終わりかしら？」

「はあっ、はあっ、んな訳…。」

「じゃあ、こつちから行かせてもらおうわ。」

そう言うと、足元が光る。目を凝らして見ると、魔法陣の様な物が描かれている。ま  
ずいと思つたのも束の間、利き足である右足は拘束されており、1ミリたりとも動くこ  
とは出来ない。

「ちなみに紫、この魔法陣はいつから？」

「優とルールの話してた辺りからかしら。」

「そんなの用意周到過ぎて怖いわ…。」

「そうでなきや本気の優は倒せないでしょう？」

「あ…。。やっぱり、バレてる感じ？」

「ええ。もちろんバレてる感じ。」

私の力量を見抜くなんて、一体紫はどこまで化け物なのかね…。その紫に言わせれば私は化け物以上の化け物なんだろうけど。

…… 私は、本気を出せないんじゃない。出そうと思えば簡単に出せる。幽香と戦った時も、7割程度しか出してない。今だつてそうだ。

… 私は、本気を出すのが怖いのだ。

#####

私が鬼に拒絶されたのは角が無いからという理由だけでは無い。まだそれだけなら誰かが構ってくれたかもしれない。

私はまだ小さかった頃、たった一人の友達と散歩に出かけた時に妖怪に出会った。果たしてその妖怪が襲ってきたのは、私が人に見えたからなのか一緒にいた鬼もまだ子供だったからなのかは分からないが、とにかく私はその妖怪を撃退した。

… いや、撃退ならまだ良かったのだろう。

私は身の危険を感じ、一瞬でその妖怪を肉塊に変えてしまった。二秒程度しかかからなかった。

その時の友達の鬼の目は未だに忘れることは出来ない。完全に怯えきつた畏怖の目。その目は容易く私の心を貫いた。そして、誤解を解こうとし、近づいた。

そうだ。この時近づいたのがいけなかった。

——いやっ！来るな！この………。化け物!!

次に気が付くと、辺りは血で染まっていた。いつもなら確実にパニックになっていただろうが、その時の私は何故かひどく落ち着いていた。

ああ、私は、友達を殺したのか。たった一人の友達を、この手で、殺したのか。

雨が降っていた。周りの血も今起こった全ての事も流していく。友達の生きた証も流していく。私の心も、流していく。

全ては、戦ったから。全ては、本気を出したから。全ては、私がこの世に存在しているから。

友達に付いた血を、水で綺麗に洗い流し、里の門の近くに横たわらせた。もう、私が鬼の社会この世にいる理由は無い。

私は、人里へと歩みを進めた。

後ろで叫び声が聞こえた気がしたが、聞こえなかった。今の私にとっては、あんな奴らの声なんかノイズのようなものだ。

どうせ私は疑われるだろう。だが、それでいい。私は永遠に鬼から疎まれる存在になるのだ。

人里が見えてきた。私の生きる場所だ。そこで私は、生きていく。自分の力を封印し

て、生きていく。

こうして私は、『鬼』を捨てた。

#####

「へえ。鬼を捨てた、ねえ。」

「ええ。私は今日まで『少し強い人間』として平和に生きてきたんですよ。私のことを鬼だって知ってる人は数えられるほどですね。」

「まあそれはいいのよ。それで、本気。出すの?」

「はい。出します。だから壊れずに、しっカリ受け止めて下さいネ?」

ゾクリ、と背中に悪寒が走る。

妖怪の賢者としての本気が、こいつはまずいと言っている。こいつとは戦うなど言っている。

ピツと舌を出す。でも、面白い。やってやる。

ここで死ぬ死なないは問題では無い。本気の優と戦うことに意味がある。

「行きます。」

優の狂気じみた声が聞こえた。反射的に構える。

魔法陣が壊れるのと同時に、真紅の鮮血目に映る。下を見ると、優の腕が自分の腹を貫き、こちらをじつと見ている。

「……わた、しには、まだ、はやかつ、た、みたい、ねえ……。」

倒れる私を見つめる目は、どこか悲壮感を含んでいた。



## 第9話 「優と紫と桜の亡霊」

「いつ、つつ……。」

「あ、起きたね。」

目を覚ますと、そこは見慣れた天井。

しばらくぼうつとした後、全力の優と戦い、瞬殺されてしまったことを思い出す。お腹に手を当てると、不格好な包帯が巻かれている。ちらと優の方を見やると、目を逸らした鬼が1名、苦笑いをする蓬萊人が1名、普通に座っている九尾が1名……。つて、  
「え？ 藍？ どうしてここに？」

「どうして、と言われましても、主の危機に駆けつけるのが従者の務めなので。」

「いやー、あの炎は熱かったねー。」

「うう、その事はお忘れに……。」

どうやら、優が侵入者で紫を襲ったと勘違いしたらしく、優に襲い掛かったそう。優には効いていないようで一安心した。藍は顔を真っ赤にしており、今度は顔から炎を出しそうだ。

「そうね。ここは一つ、お茶にしましょうか。」

「あ、賛成ー。」

「そ、それでは！お茶を入れてきますね！」

「あ、私も手伝いますよー。」

「ああ、すまない。」

可愛い従者に助け舟をだすと、逃げ道を見つけたと言わんばかりに藍は立ち上がり、妹紅とともに逃げるようにしてお茶を入れに行った。

「藍、だっけ？可愛いねえ。」

「可愛いでしょう？仕事も出来るのよ。」

「なんとというか、母性があるよね。」

「あ、尻尾のもふもふは譲らないわよ。」

「はっ！盲点だった！」

すつと、表情を変える。

「ところで優。私達妖怪とか、一部の人間には能力が備わってるのは知ってるわよね？」

「ああ、紫がスキマを使うみたいな奴でしょ？」

「正確には、境界を操る、だけだね。」

「細かいことはいいの。それで、何か？」

「貴女の能力にね。ちよつと問題があるのよ。」

「え、何？ 凄く弱いとか？」

「真逆よ。強すぎるの。多分今のこの世界で近接戦で貴女に勝てる者なんていないほどよ。」

「んで、それと能力が関係あると？」

「貴女の能力は、『力を増幅させる程度の能力』って言うのよ。」

「ふーん。それで？」

「少しは関心をもちなさいよ……………それでね、貴女の能力は、自分でコントロール出来ないのよ。」

「え？ 別に出来るけど。」

「それは力よ。貴女の力の増幅具合がコントロール出来ないってこと。」

「ほーん……………え？ 不味くない？」

「今頃なのね……………そうよ。何時か自分で歯止めが利かなくなってしまうってこと。」

「あらら。んで、私を封印したりするの？」

「貴女の能力の一部を封印するわ。貴女を封印してもきつといつか出てくるもの。その場しのぎにしかないわ。」

「それじゃあ早めにお願ひするわ。」

「ん、もうとつくに終わってるわよ。」

「ええ……。紫つて妙なところで仕事が早いよね。」  
「一言余計よ。さ、お茶にしましょ。」

#####